

2009年大学教育学会課題研究集会レポート（1）

報告者： 舛本 直文

（FD 委員会委員長補佐、大学教育センター）

2009.11.28 於：大阪「御堂会館」

学会創立 30 周年記念特別講演 テーマ：「教育への問いかけ」

講演者： 鷺田清一（大阪大学総長）

はじめに：教育における倒錯

大学院生にも教養教育としての共通教育の授業を実施している大阪大学の総長であり臨床哲学を標榜される鷺田先生がどのような講演をされるか、みな興味津々の記念講演であった。大学教育学会の創立 30 周年を記念して一般にも公開された講演会でもあった。

鷺田先生の講演は「教養とは何か」に関連付けて「教育の倒錯」と題する事例の紹介から始まった。それは鷺田先生ご本人に「教育への感覚的な抵抗」があるからだということであった。事例は、第 1 に新旧の卵の見分け方とどちらから食べるかという発問の例から「身につかない・使われない知識」の現状、第 2 に学校の中だけで成立する子どもへの教師の問い（子どもは正解を当て、教師は子どもを試す言葉かけ）という問題、それは所有物としての知識や教師が鍵を掛けて管理するような知識のようであること、第 3 に家庭での会話から大人のロジックのコピーとなってしまった子どもたちの発言（ブルセラ少女の「私の勝手でしょう」＝近代的所有権者として）の問題、つまり家庭教育における親の論理のトレースという子供たちと親の思考・論理構造の関係の現状、この 3 つの事例から、「教育」とはどういう営みなのか改めて考えるというのが講演のスタートであった。

価値の遠近法

続いて、「教育の原点」は「人として生きるうえで失敗したり痛い思いをして編み出したりした知恵を次の世代へと伝えていくこと」であり、「教養がある」とは「価値の遠近法」を身につけていることであるという話に移った。教育は「これだけは確実なこと」「これだけは決してしてはいけないこと」などの価値の軽重や価値の先後、つまり、「絶対なくてはならないもの」「あってもよいもの」「あったほうがないよりも良いもの」「あってはならないもの」のような価値の奥行きを伝え、ある意味で「子どもたちを成熟させる場が学校」であると強調された。

しかし現代社会を見通せば、世の中は価値のパースペクティブではなく「勝ち組・負け組み」のような 2 分法や白黒をつける単純な物言いや思考が氾濫していること、さらに物事の彩や曲折を大事にして、コンテキストやニュアンスに重きを置くべきメディアでさえも、そのような単純な物言いと強度のみが強くなっている現実があると鷺田先生は指摘された。これによって、現代の大きな問題である「クレーマー」の増加も当然の帰結であると説明されるのである。つまり、現代の世の中は「思考停止状態に陥っている」とされ、生きていくための自活の力や相互扶助など最低のシステムや技術を失い、どうしても免除できないものを公共的なサービスや民間のプロに任せる社会になってしまったと説明された。クレーマー達は自分では何もできないゆえにクレ

ームをつけるしかない、サービスを与えてくれる側に落ち度があるとクレームをつけるしかない世の中が変わってしまったと分析された。

教養とは

「教養」とはこのような時代にあって「人々をもっと受身でないようにさせるもの」であるはずだと驚田先生は主張される。つまり、現代で身につけるべき教養は「しぶとい知性」「タフな知性」とでもいえるようなものであり、すぐに答えが出せないような問題や「白黒をすぐにつけられないような問題」に対して、「分からないものに対して分からないままに正確に対処すること」が重要であること、それが「本当の知性であり教養がある」ということだと強調された。一番やってはいけないことは、「分からないことを捨ててしまうこと」「分からないことを自分の枠組みでむりやり解決してしまうこと」であるとも指摘された。「分からないけれど、これは大事だ」という嗅覚の大切さや、「不確定なまま一つを選ばなければならない」というような政治的知性などの臨床的な教養観も紹介され、現代社会では「船底を修理しながら航海」していかざるを得ない状況にあるという認識も示された。これが現実の知性であり、「分からないものを捨て、分かるものだけで対処してきた」のが受験の対処法であったと批判されるのである。

学問における問い

学問の世界も同様であり、根本的に問えば正解が一つではないようなことが多くあること、看護やケアにしても臨床現場に求められるものは複数の解である場合が多く、「分からないものを問題として問い続けること」、その際に「自分の思考の枠組み自体をも問い続けること」が大切であると強調された。「世界の存在の理由」「私がここにいることの意味」などの問いは、「問い続けること自体にその問いの意味の大半があるもの」なのであると。

受験を経験してきた学生たちに対しては、入り口で「大学でのものの学び」を教えることの重要性も指摘され。「分からないという自体にしぶとく耐えつづけること」という変換を必要とすると述べられた。大阪大学では大学院生に対して共通教育を実施しているのは、「専門家ほど教養が必要」という立場をとっているからであり、そこでは「誰もが専門でないような問いを立て」、議論や主張をぶつけ合うような授業が展開されているそうである。ここでも「価値の遠近法」の重要性を指摘されるとともに、現在、社会を賑わしている事業仕分けに関しても、その「価値の遠近法」不足を指摘されるとともに、大学人や科学者が一般市民の心に届く言葉を持っていなかったという問題も指摘されて話を締め括られた。

おわりに

驚田先生の講演は柔らかい言葉ではあるが、臨床の知としての現代社会を的確に捉えながら、そこに必要な「しぶとい知性」の必要性を強調されていた。臨床の哲学を標榜される先生ならではのスタンスであり、そこから導き出される教養や教育観には首肯できることが多い講演であった。学士課程教育で身につける学力を「学士力」としそれを如何に測定するかというような問題意識がある中で、「教育」と「教養」というものの根幹を問い直すご指摘であったといえよう。大学教育学会の「3大名講演の一つ」という声も上がったほどの共感の多い講演であった。